

調査結果の速報

日本のエホバの証人 定量的研究

エホバの証人の見方, 家族生活, 幸福に関する調査

研究責任者

シャオジュン・フー
(Xiaojun Hu, Ph.D)

共同研究者

村田忠彦
(Tadahiko Murata, Ph.D)

推奨引用形式

シャオジュン・フー, 村田忠彦

「日本のエホバの証人 定量的研究: 調査結果の速報」

2024年3月 www.jwj-qs.jp

この科学的研究は、エホバの証人の日本支部と世界本部の協力を得て、研究者によって独自に実施された。国際的な研究者で構成される学術諮問委員会が調査デザインを検討し、データの妥当性を検証し、この速報を承認した。

学術諮問委員会

アイリーン・バーカー
(Eileen Barker, Ph.D)

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス,
宗教社会学名誉教授

木幡洋子
(Yoko Kowata, Ph.D)

愛知県立大学教育福祉学部名誉教授

ジェームズ・T・リチャードソン
(James T. Richardson, Ph.D, JD)

ネバダ大学リノ校社会学・司法学名誉教授

スチュアート・A・ライト
(Stuart A. Wright, Ph.D)

ラマー大学社会学部教授

プロジェクト・コンサルタント：ジョリーン・チュー (Jolene Chu, MA), 上級研究員, エホバの証人

学術諮問委員会による 研究方法のレビュー

日本のエホバの証人 (JW) 団体には、全国に2800以上の会衆 (各地域にある信者のグループ) があり、20万人以上の信者がいる。最近、信者のライフスタイル、信条、行動について多くの情報を得る必要が生じた。政府関係者や政策立案者に情報を提供し、このグループとその価値観や活動に関する日本での非常に否定的なマスコミ報道を検証するためである。そのような報道により、日本政府はJWの活動の一部を制限する、あるいは宗教団体としての地位を完全に剥奪するようという提案を検討するようになった。それゆえ、この問題について証拠に基づく情報をごく短期間で集める必要があり、クリエイティブで集中的な努力が求められた。開発された複雑な調査デザインは、他の場所で宗教団体に関する調査を展開する方法のモデルとして役立つだろう。採用されたアプローチの方法を、手順と全体的な努力に対する評価とともに簡単に説明する。

統計学者と情報科学の研究者である2人が、それぞれ研究責任者と共同研究者としてプロジェクトを監修した。調査デザインと分析計画は、経験豊富な研究者から成る学術諮問委員会によって検討された。この宗教団体は、調査結果の作成に関与せず、研究者が調査対象者にアクセスすることを認めた。こうして、日本全国のJW信者の無作為サンプルに近いサンプルを対象にしたオンライン調査を実施することができた。

宗教団体の信者を対象に全国的な調査を行うのは非常に難しく、かなりの費用がかかる可能性がある。ここ数十年の間に、インターネットによってこうした作業はより行いやすくなっている。もちろん、これは宗教団体がそのような目的のために開発されたインターネットベースの調査ツールを使って信者とやり取りできることが前提となる。しかし、たとえ宗教団体がインターネットを通じて信者とやり取りできるとしても、多くの課題がある。宗教団体の全信者にインターネット調査への回答を求めるなら、膨大な量のデータを分析しなければならなくなり、これは現実的ではない。したがって、信者を十分に代表しているといえるサイズのサンプルを集めて、関心のある重要な変数 (年齢、性別、団体での活動期間、育児方法など) に関するデータから結論を導き出すには、無作為抽出法を採用する必要がある。

またサンプルは、重要なさまざまな変数に関する分析を可能にするのに十分なサイズでなければならぬ。最初のステップは、日本の47都道府県から少なくとも1つの会衆を含む、150の会衆を無作為に選ぶことだった。これは、諮問委員会のメンバーである経験豊富な研究者 (JWではない) によって行われた。その後、日本のJWの事務所から提供されたメールアドレスを使って、150の各会衆の連絡担当者 (会衆の世話役を務める長老) にメールを送り、研究プロジェクトについて説明し、一定の参加

資格を満たした全信者に調査アンケートへのリンクを送るよう依頼した。対象者にはアンケートへのリンクが送られた。このアンケートは、必要な分野の情報が得られるように開発されたもので、回答の機密性を確保するため、匿名でオンラインで記入された。

参加資格は、18歳以上であること、現在日本語会衆の集会に参加しているバプテスマ（浸礼）を受けた信者であること、過去6カ月間伝道に参加していたことなどである。1万1000人以上の信者に参加を呼び掛け、8000人以上がアンケートのリンクを希望し、受け取った。アンケートフォームが適切に機能することを確認するためにいくらかのテストを行った後、調査は2024年1月に2つのグループに分けて実施された。調査の結果、合計7640件の回答が得られた。合計447の回答が削除され、残りの7193の回答が分析に使用された。参加資格を満たさなかった回答者（160人）はサンプルから除外され、社会的望ましきのバイアス（社会的望ましきを測る5つの質問*全てに同じ極端な回答で答える）がかかった回答をした239人の回答者もサンプルから除外された。また、「自分の誕生日より前の年にバプテスマを受けた」というあり得ない報告をした45人の回答者と、少なくとも2つの連続する質問のセットについて同じ回答を選択する「連続同一回答（ストレートライニング）」に該当した3人もサンプルから除外した。

全体的な調査デザインと計画は、さまざまな国で少数派宗教の研究に何十年も携わってきた経験豊かな学者から成る諮問委員会によって検討された。諮問委員会の学者たちはJWではない。このように、調査はJWの調査員によって実施されたが、独立した諮問委員会の存在は、この調査に信頼性を与えてい

る。また、注目に値する別の点として、調査デザインの他の要素（会衆の無作為抽出、匿名での回答、社会的望ましきの尺度のような検証された方法の使用、データ収集と分析の透明性、さらに調査デザインの限界に関する包括的な声明）が、このプロジェクト全般の妥当性を高めている。

上記のアプローチによって、JWの生活の多くの側面を分析することを可能にする大規模なデータセットが得られ、マルチレベルの手法の有効性が示された。この点で独立した研究者から成る諮問委員会が果たした役割は非常に大きい。アンケートは長く、50セットの主な質問が、JWの生活の4つの分野（宗教的要素、家族生活、全般的な見方、健康と幸福）に分類されている。これらのデータは、日本で広まっているJWに対する批判に応える上で有用である。また、この調査のために開発された方法は、他の宗教団体や宗教学者が、特定の宗教団体の信者の生活の詳細を調べる際のモデルとなると考える。

JWJ-QS 学術諮問委員会

アイリーン・バーカー, Ph.D

木幡洋子, Ph.D

ジェームズ・T・リチャードソン, Ph.D, JD

スチュアート・A・ライト, Ph.D

* ロン・D・ヘイズ, トシ・ハヤシ, アニータ・L・スチュワート, 「社会的に望ましい反応の5項目測定法」, 『教育・心理測定』 (*Educational and Psychological Measurement*) 49, no.3 (Autumn 1989) : 629-636, <https://doi.org/10.1177/001316448904900315>

はじめに

「日本のエホバの証人 量的研究 (JWJ-QS)」は、日本のエホバの証人の見方、価値観、行動を調査するものである。日本のエホバの証人は、約21万4000人の信者がいる比較的小さなキリスト教系宗教団体である。¹

この速報は、調査から得られた主要な予備的所見と結論を示すものである。調査結果の報告書の完全版は、<https://jwj-qs.jp/>にて順次公開される予定である。

エホバの証人 (JW) は、自分たちの信条を人々に伝えることで知られるグループで、19世紀後半に米国で活動を始め、1920年代に初めて日本に上陸した。それ以来100年以上の間、日本で行われたエホバの証人についての科学的な調査は、1977年に行われた社会学的調査のみである。²

エホバの証人に関する科学的データの欠如は、少数派宗教を巡る最近の2世問題との関連で大きな注目を集めている。2022年7月、安倍晋三元首相が統一教会信者の成人した息子に殺害された事件を受けて、少数派宗教に対する扇動的な言説が展開されている。元エホバの証人や、エホバの証人の親に育てられた2世の活動家たちの一部がこの運動に参加し、JWの子育て、親権、医療選択に関連する申し立てに基づき、JWの宗教活動を制限するよう政府に呼び掛けている。

この独立した研究チームによる研究は、現在エホバの証人の宗教団体を構成している人々 (第1世代、第2世代の信者を含む) の視点を探ることによって、学術的な文献と一般の理解のギャップを埋めようとするものである。研究チームは、日本のエホバの証人の日本支部および世界本部の協力を得て開発したアンケート調査を用いて、日本各地の信者を対象に方法論的に厳密な調査を実施した。国際的に著名な学者から成る学術諮問委員会が、調査デザインと研究結果を検討した。彼らのコメントや提案は、調査デザインに反映されている。

方法

47都道府県にある2807の日本語会衆から無作為に選ばれた150の会衆を対象に、匿名のオンライン調査が行われた。調査に参加できたのは、18歳以上で、現在日本国内の日本語会衆の集会に出席しており、過去6か月間、宣教活動に参加していた人である。選ばれた会衆の中で資格を満たしていた1万1344人がアンケート用のリンクを受け取ることができた。実際にリンクを希望したのは8197人だった。調査への参加は任意であり、入力されたアンケートは、調査プラットフォーム KoboToolbox に直接、匿名で提出された。³

¹ 「2023奉仕年度の報告 エホバの証人の世界的な活動: 2023年 国や地域からの報告」

<https://www.jw.org/ja/ライブラリー/本/2023奉仕年度の報告-エホバの証人の世界的な活動/2023年-国や地域からの報告/>

² 「日本における『エホバの証人』の発展と親族関係の諸問題」 (Aspects of Kinship and the Rise of Jehovah's Witnesses in Japan), Bryan R. Wilson 著, 鶴岡賀雄・林淳訳, 『国際宗教ニュース』Vol.16, No.3, 4, 国際宗教研究所出版, 1978年。

³ KoboToolboxは、データセキュリティ対策、パスワードで保護されたアクセス制限、データの暗号化、ウイルスや侵入者に対するファイアウォール保護、スキップロジック機能により、欧州連合の一般データ保護に完全に準拠した機密データ収集を可能にした。同じユーザーが同じデバイスで複数回アンケートに回答することを防ぐため、回答者1人につき1回のみ送信できる機能が選択された。 (<https://www.kobotoolbox.org>)

調査デザイン アンケートには、宗教に関する見方や経験、家族生活や子育て、一般的な見方や価値観、身体的・精神的健康についての質問が含まれていた。調査の最後に、参加者は関係する分野についての自由記述を追加することができた。この速報には、その一部を抜粋して掲載している。

調査は2つのグループに分けて実施された。2024年1月5日から9日までと、1月10日から14日までである。招待された1万1344人の信者のうち、合計7640人から回答が寄せられ、回答率は67.3%だった。各地域の回答率は以下の通り。北海道63.9%、東北66.8%、関東67.0%、中部69.8%、関西67.7%、中国71.5%、四国66.0%、九州64.3%。

データクリーニングの過程で、参加資格を満たしていなかった160人の回答と、信頼性を欠く48件の回答が、科学的基準に従ってデータセットから除外された。調査には、社会的に望ましい回答、つまり回答者の本当の意見や経験ではなく、他人から好意的にみられることを意図した回答のパターンが明らか回答者を特定するための質問が含まれていた。⁴ それらの質問に対する極めて好意的な回答に基づいて、239件の回答が除外された。合計447件の回答がデータセットから除外され、7193件の回答がサンプルとして残った。⁵

人口統計学的調査結果

調査サンプル ($n = 7193$) の人口統計学的特徴を日本の一般人口の分布と比較すると、以下のようになった。

性別と年齢分布 日本のエホバの証人は、初期から男女の数に明確な差異が見られてきたが、エホバの証人の女性の比率 (71.0%) は18歳以上の一般人口

(51.8%) より高い。⁶ エホバの証人のサンプル集団では、若年成人 (18歳から39歳) が14.5%、中年成人 (40歳から59歳) が36.9%、高齢成人 (60歳以上) が48.6%だった。

教育 表1は、サンプル集団と一般集団の教育レベルを比較したもの。(一般人口は15歳以上、サンプル人口は18歳以上。) JWの回答者の半数以上 (58.4%) は高校を卒業しており、3分の1以上 (36.7%) が中等教育より後の学校を卒業している。対して一般人口では、それぞれの割合は35.0%と33.0%である。JWの回答者のうち、「正式な教育は受けていない」と回答したのは2人で、52人 (0.7%) は無回答だった。

表1. 教育レベル、日本の人口とJWのサンプル集団

教育レベル	日本の人口, 15歳以上 ($N = 108259$, 単位: 千人)	JWサンプル, 18歳以上 ($n = 7193$)
小学校・中学校	11.2%	4.1%
高校・旧中	35.0	58.4
短大・高専	12.8	24.4
大学・大学院	20.2	12.3

出典: 総務省統計局, 「第73回 日本統計年鑑」, (東京: 総務省統計局, 2024) 63ページ, 表2-9, 年齢階級, 教育程度別15歳以上人口 (平成12年~令和2年), <https://www.stat.go.jp/english/data/nenkan/73nenkan/zenbun/en73/book/index.html#page=96>

⁴ ロン・D・ヘイズ, トシ・ハヤシ, アニータ・L・スチュワート, 「社会的に望ましい反応の5項目測定法」, 『教育・心理測定』 (*Educational and Psychological Measurement*) 49, no.3 (Autumn 1989): 629-636. <https://doi.org/10.1177/001316448904900315>

⁵ データセットから除外された447件の内訳は以下の通り。参加資格を満たしていなかった人が160人, 「誕生年より前の年にバプテスマを受けた」というあり得ない回答をした人が45人, 少なくとも2つの尺度について同じ回答を連続して選択した (「連続同一回答 (ストレートライニング)」と呼ばれる) 人が3人。さらに, 極端に社会的に望ましいと見なされた回答が239件除外された。

⁶ 出典: e-Stat, 統計で見る日本 (人口推計/各年10月1日現在人口 [年齢 (各歳)], 男女別人口及び人口性比-総人口, 日本人人口, 2022年10月1日), アクセス・編集: シャオジュン・フー, 2024年1月25日。表1. 年齢 (各歳), 男女別人口及び人口性比-総人口, 日本人人口, 2022年10月1日。サンプル人口と同じ年齢層で比較を行うために, 一般人口調査の報告書から18歳以上の割合を計算した。

就業と経済的特徴 JWの全サンプル人口（18歳以上）のうち就職していたのは57.7%、日本の一般人口においては60.9%である。⁷ 無職者の割合は、65歳未満のJWにおいては3.4%、日本の一般人口においては2.6%（65歳未満に限定すると2.7%）である。⁸ 一般人口とJWサンプルに見られる差は、年齢分布の差によるものと考えられるだろう。

この調査ではまた、回答者の経済的状況を5つのカテゴリーに分類した。JWのコミュニティでは女性と高齢者の比率が高いことから、かなりの部分が経済的に不利な状況にあることが示唆される。日本の2021年の貧困率は15.7%で、シングルマザーの50%以上、高齢者の25%、子どもの14%が貧困状態にあり、全体の食料不安率は3.4%であった。⁹ 公的な食料不安の指標は主観的な評価とは比較になら

ないかもしれないが、本調査における以下の結果は注目に値する。「食べ物のためのお金すら十分でない」と回答した人はわずか2.4%だったのに対し、8.6%は「食べ物のためのお金は十分ある」、30.3%は「食べ物や服を買うためのお金は十分あるが、大きな買い物をするのは難しい」、46.0%は「家電製品も無理なく買うことができる」、7.8%は「かなり高価なものも買う余裕がある」と回答した。

主な調査結果は、宗教に関する見方や経験、家族生活、全般的な見方、健康と幸福というアンケートの構成に従っている。回答者はアンケートの最後にコメントを追加することができた。本報告書には、調査結果を反映したコメントを抜粋して掲載している。

宗教に関する見方や経験

JWJ-QSでは、宗教に関する見方や経験について幾つかの質問を行った。(1) どんな人がエホバの証人になったのか。いつ、どのようにして、なぜそうなったのか。(2) どんな人が信仰するのをやめたか。一部の人に戻ってきたのはなぜか。(3) エホバの証人は、自分たちの会衆での生活、仲間の信者、社会全体をどのように捉えているのか。調査結果から、日本におけるエホバの証人の成長、個人の改宗の特徴、個人がその宗教に魅力を感じた理由、社会との関係が明らかになった。

歴史の長い宗教は主に世襲によって新しい改宗者を得る。これとは対照的に、新しい宗教は多くの場合、第1世代の成人改宗者で構成される。日本におけるエホバの証人の増加は、第1世代の改宗者と幼少期からこの宗教を教えられて育った人たちによるものである。本調査では、現在のエホバの証人が改宗した背景を調査した。それには、家族における宗教的な歴史、エホバの証人になり、エホバの証人であり続ける個人的な動機などが含まれる。

⁷ 総務省統計局、「第73回 日本統計年鑑」、(東京：総務省統計局, 2024), 429ページ; 表19-1, 就業状態別15歳以上人口, <https://www.stat.go.jp/english/data/nenkan/73nenkan/zenbun/en73/book/index.html#page=462>

⁸ 総務省統計局、「第73回 日本統計年鑑」、(東京：総務省統計局, 2024), 432ページ; 表19-2, 年齢階級, 就業状態別労働力人口, <https://www.stat.go.jp/english/data/nenkan/73nenkan/zenbun/en73/book/index.html#page=466>

⁹ 上田 遥「多次元貧困：現代日本の低所得シングルマザーからのエビデンス」、『食の倫理』(Food Ethics) 8, no. 2 (2023): 13, <https://doi.org/10.1007/s41055-023-00123-9>

バプテスマを受けてエホバの証人になるという決定の前に、通常、聖書を学ぶ期間が先行する。これは、その人が第1世代であるかどうかには依存しない。回答者は、バプテスマを受ける前に聖書を学んだ期間と、バプテスマを受けるという決定を強制されたか選択したかの認識について報告した。

調査対象には、エホバの証人のコミュニティから一時的に離脱することにした人たちが含まれている。この調査では、回答者が自発的に宗教活動をやめたのか、証人の道徳的行動規範に著しく違反し、行いを改めなかったために除名されたのか、といった理由については尋ねていない。回答者は、コミュニティに戻ることにした理由を報告した。

人が宗教に入信する際には、その宗教の信条を考慮するだけでなく、その宗教が自分をどのように支援してくれるのか、その宗教が対人関係にどのような影響を与えるのか、他人がその宗教をどのように見ているのか、について主観的に評価する。

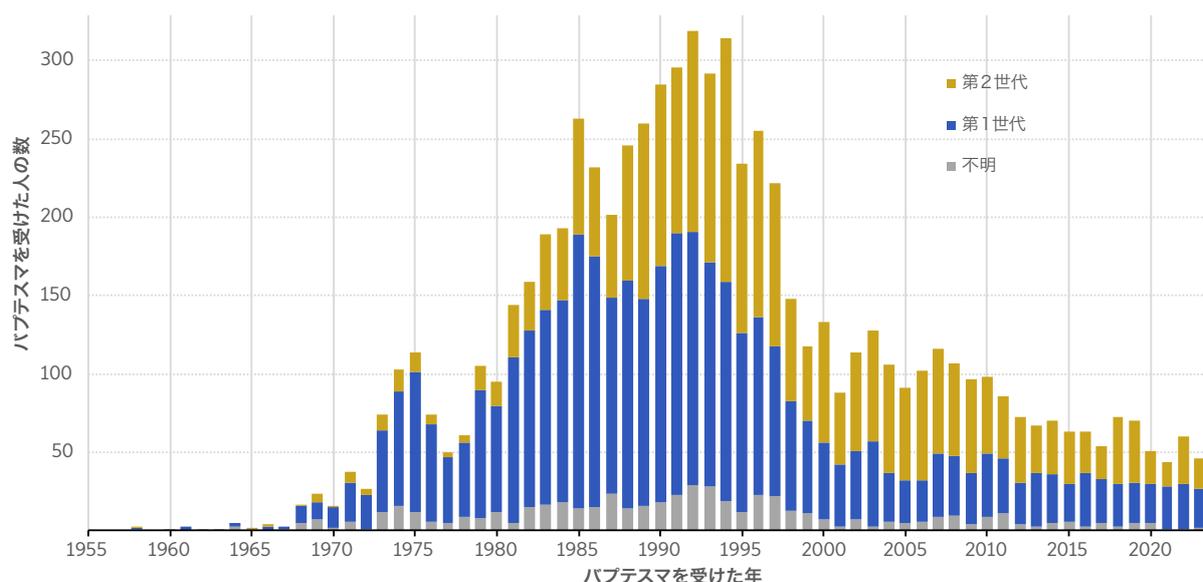
エホバの証人になる

どんな人が、いつ、どのようにして、なぜ

日本のエホバの証人は、戸別訪問や街中で会う人に信仰を伝える活動で知られている。JWJ-QSのデータは、1970年代から1990年代初めにかけて急激な増加が見られ、その後は新たにバプテスマを受ける人が減少したという公式報告と一致している。

第1世代と第2世代の改宗者 エホバの証人が広まった比較的早い時期にバプテスマを受けた人は、ほとんどがJWの第1世代だったが、改宗者の数が増えるにつれて、新たにバプテスマを受けた人のうち、少なくとも片方の親がJWであった人の割合が増加している。全サンプルのうち、53.2%はJWの親を持たない第1世代であり、38.9%は少なくとも片方の親がJWの第2世代であった。（「家族の中で、エホバの証人なのは、あるいは亡くなった時点でエホバの証人だったのは誰か」を尋ねる別の質問では、45.8%がJWの親がいると回答している。）図1は、回答者のバプテスマ年別のJW第1世代と第2世代の内訳を示している。（回答者がバプテスマを受けたのが親の前か後かを判別できなかった場合は、未分類とした。）

図1. エホバの証人の第1世代と第2世代 (1955年～2024年)



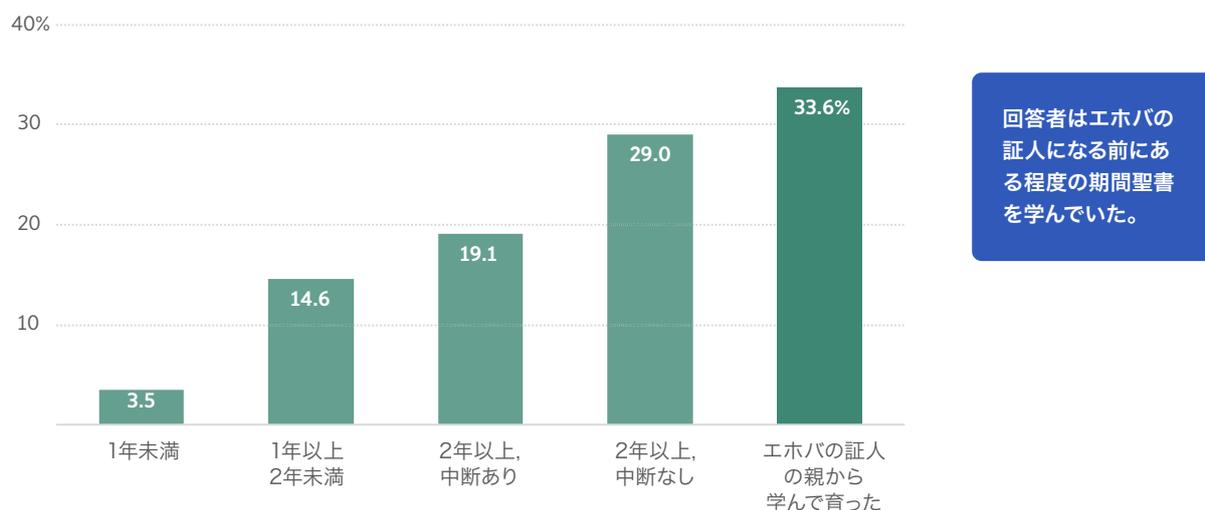
注：第1世代, $n = 3826$ (53.2%), 第2世代, $n = 2797$ (38.9%), 未分類, $n = 570$ (7.9%)

親がJWになった時の年齢に関して、第2世代JWの55.5%は6歳以下、4分の1（25.0%）は7歳から12歳であった。そのほかは、親が改宗した時に10代だった人が8.5%、成人だった人が11.0%で、親子関係において宗教信条が世代を超えて影響すること示唆している。

バプテスマを受けた年齢 バプテスマを受けた年齢の平均は約28歳。回答者の4分の1以上が未成年（18歳未満）でバプテスマを受け、半数以上が18歳から39歳でバプテスマを受けた。そのほかは、さらに上の年齢でバプテスマを受けた。

バプテスマを受ける前の学びの期間 エホバの証人としてバプテスマを受けるかどうかの決定は、かなりの時間と学びを経た後になされる。図2に示すように、回答者の約3分の1は、JWである親または保護者からエホバの証人の教えについて学んだ。3分の2は、JWの信者による個別レッスンで学んだ。そのうち、1年以上学んだ人は62.7%、継続的または断続的に2年以上学んだ人はほぼ半数（48.1%）だった。

図2. バプテスマを受ける前に教理を学ぶために費やした時間



注：n = 7193

学習における個人の選択の認識 本調査では、日本のエホバの証人がどの程度改宗を強制されたと感じているか、あるいはその決断は個人の選択であったと感じているかを調査した。ほとんどの人（86.5%）は、JWが自分をコントロールしようとしたという記述に同意せず、コントロールしようとしているのを感じた人は10%未満（8.2%）であった。また、96.8%はエホバの証人になることを自分個人で決定したと答え、この点に同意しなかったのは1.8%だった。

父親は仏教、母はエホバの証人で、宗教的に分裂した家庭で育ちました。……私は、自分で考え、自分で決断することができました。

男性、50代、第2世代

宗教に対する決定は個人個人が決定する事、たとえ子供であっても親が強制してはいけないと思う。

男性、60代、第1世代

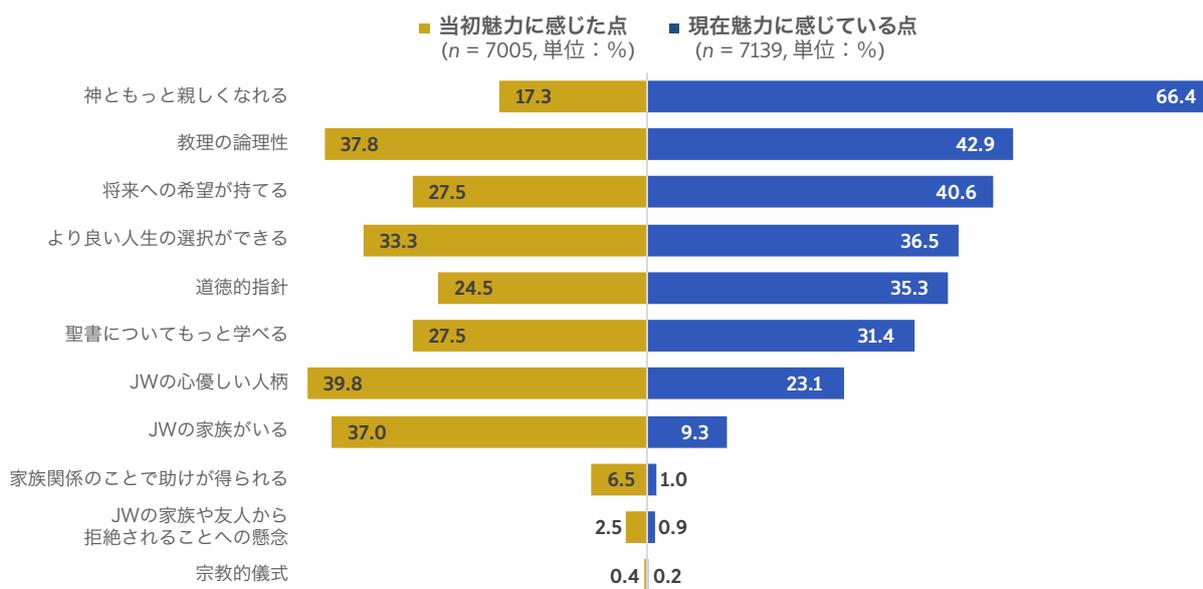
入信および継続の動機 エホバの証人に魅力を感じた当初の理由と現在魅力を感じている点は、図3に示すようにいくらか異なっている。これは、ほとんどの回答者がこの宗教への改宗を個人的な選択であると認識しているという結果に沿うものである。

「教理の論理性」は、魅力を感じた点として当初でも（37.8%）現在でも（42.9%）、選択した人が特に多かった3つの項目のうちの1つであった。当初の動機として上位に挙げた他の2つ、「JWの家族がいる」（37.0%）と「JWの心優しい人柄」（39.8%）

は、時間の経過とともに変化している。「教理の論理性」と並んで現在の動機の上位を占めたのは、「神ともっと親しくなれる」（66.4%）と「将来への希望」（40.6%）だった。改宗しなければJWの家族や友人から拒絶されるのではないかという懸念を示したのはわずか2.5%で、エホバの証人を続ける動機としてこれを選んだ人は1%未満であった。対照的に、現在の動機として多く選ばれたのは、「より良い人生の選択ができる」（36.5%）、「道徳的指針」（35.3%）、「聖書についてもっと学べる」（31.4%）だった。

図3. エホバの証人の当初の魅力と現在の魅力

当初、エホバの証人のどんなところに魅力を感じましたか。現在、エホバの証人のどんなところに魅力を感じていますか。



注：「答えたくない」および「どれもでない」の回答は削除されている。

「教理の論理性」は、エホバの証人にとって当初、また現在の主な魅力となっている。

その他の当初の魅力：

- ・ JWの心優しい人柄
- ・ JWの家族がいる

その他の現在の魅力：

- ・ 神ともっと親しくなれる
- ・ 将来への希望

離脱と復帰

誰がやめるのか、どうして戻ってくるのか

本調査では、回答者がエホバの証人になったことをどの程度後悔しているか、またエホバの証人との交友をやめたことがあるかを調査した。大多数(96.1%)は、エホバの証人であることを後悔することは「一度もない」または「まれに」しかないと回答した。後悔することが「しばしば」または「いつも」と答えた人は1%未満だった。

全サンプルのうち、268人(3.7%、女性204人、男性64人)が交友をやめたことがあると回答した。¹⁰ 交友をやめた時の平均年齢は30.6歳で、ほとんどの人が20代で交友をやめている。交友をやめたと答えた人のうち、ほぼ3分の1(30.6%)が2年以内に、ほぼ半数(48.9%)が4年以内に交友を再開した。4分の1が5年から10年以内に、ほぼ4分の1が10年以上の中断後に交友を再開している。

戻った理由 エホバの証人と再び交友を持つようになったさまざまな理由の重要度を尋ねた。その結果、約90%が以下の3つの理由を重要またはとても重要と回答した。

- 神ともっと親しくなりたかった(90.3%)
- 人生でより良い選択をしたかった(89.6%)
- エホバの証人の生き方の方が良いと思った(89.6%)

回答者の4分の3は、「JWだった時の方が幸せだったこと」を重要またはとても重要と回答した。JWとの交友をやめている間、JWの友人や家族との交流が限られていた回答者もいたと思われるが、JW

の友人(37.7%)やJWの家族(29.9%)との交友が恋しくなったことが交友再開の重要な理由だと答えた割合は比較的低かった。

会衆からの支援、人間関係の変化、差別

本調査では、日本でエホバの証人であることによるメリットとデメリットについて調査した。

会衆からの支援 特に困ったときに、エホバの証人が自分たちの宗教的コミュニティから社会的なつながりや支援をどの程度得られると考えているかを尋ねた。80%以上が、会衆で、皆がまとまり、強くなれるようにするための努力が見られることや、何かあった時には会衆の人たちに頼れること、大変な経験をしている時に話し相手になってくれる人が会衆にいることに関し、「当てはまる」または「非常に当てはまる」と回答している。また、会衆に支え合う習慣が見られることや、自然災害、戦争、その他の非常事態の時に頼りになることについても、90%近くが「当てはまる」または「非常に当てはまる」と回答した。

会衆内に問題がないことは絶対ない、でも家族だからすれ違いなどは当たり前で、話し合ったり、許したり、許されたりして……一致して居心地が良くなります。

女性、30代、第2世代

人間関係の変化 エホバの証人になる前と比べた人間関係の変化に対する認識を尋ねた。回答によると、エホバの証人になった後、配偶者との関係(44.5%)、子どもとの関係(30.9%)、近所、職場、学校の人との関係(25.6%)が良くなった。全ての人間関係において、少なくとも4分の3が良好な関係または改善された関係にあると回答している。

¹⁰ エホバの証人の間では、不活発になった人(もはや会衆と共に宣教に参加していない人)と、もはやエホバの証人でない人(エホバの証人の行動規範に対する重大な違反を改めなかったために排斥されたか、正式に会衆との関係を自ら断絶した人)とが区別されている。不活発になった場合は会衆の制裁を受けないが、排斥されたり正式に自ら断絶したりすると、信仰面や社会的な面でのつながりがなくなる。とはいえ、そうした人も宗教的な集まりに引き続き出席することができる。また、同居家族内では、通常の家族付き合いが継続される。排斥された人は、行いを改めて、好ましくないとされる行動をやめるなら、復帰して再び会衆と交友を持てるようになる。「エホバの証人ではなくなった人を選べますか」、「よくある質問(シリーズ記事)」、エホバの証人の公式ウェブサイト、アクセス日: 2024年3月5日、<https://www.jw.org/ja/エホバの証人/よくある質問/避けるか/>

メディアやソーシャルメディアなどでの差別の経験 過去12カ月間にどんな差別を経験したかについての回答があった。エホバの証人の95%近くが、この宗教団体について誤り伝えていると感じる報道を目にしたと回答している。本調査によって、否定的なメディア報道やソーシャルメディアコンテンツの影響も明らかになった。10%近くが、エホバの証人に関するソーシャルメディアの投稿を見た家族や友人（JWでない）から圧力を受けたと回答した。また、500人以上が侮辱の被害に遭い、63人が雇ってもらえず、54人が宗教を理由に脅しや攻撃を受けた。

ニュースで取り上げられるのはエホバの証人に対するネガティブな報道ばかりで、エホバの証人であることを幸せに感じている2世の声は取り上げられないことを残念に思う。

女性、20代、第2世代

家族生活

日本では近年、結婚、子育て、多世代家族の構成が大きく変化している。例えば、出生率の低下に伴い、1世帯あたりの未成年の子どもの数は減少し、離婚率、ひとり親世帯、単身世帯は増加傾向にある。

JWJ-QSは、回答者の家族構成、家庭生活や子育てに関する態度についてデータを収集した。

家族構成 サンプルのほとんどのエホバの証人は結婚しているか、結婚していたことがあるが、回答者の平均年齢が高いこともあって、そのうちの大部分には未成年の子どもがいなかった。未成年の子どもがいるエホバの証人のうち、90%近くが結婚しており、未成年の子どもたちは家庭で2人の親から世

話を受けている。単身世帯のエホバの証人は若年層から高齢者まで幅広く、その割合は日本の一般人口の約半分であった。¹¹

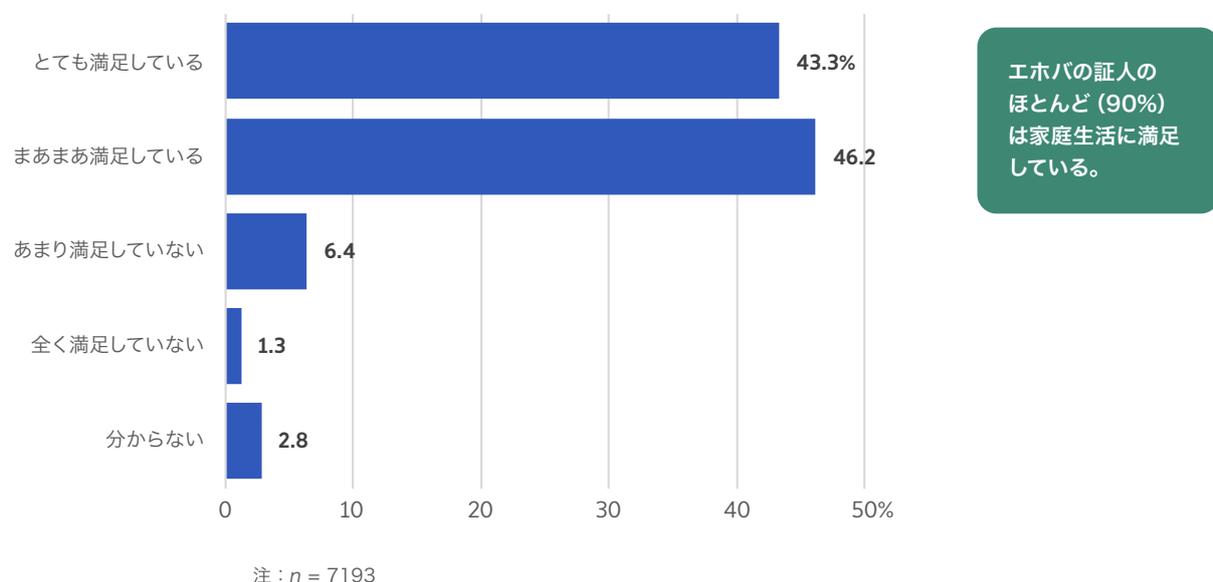
このデータから、多くのエホバの証人が多世代家族の一員であることが明らかになった。その中には3世代世帯も含まれるだろう。高齢者と未成年の子どもがいて、エホバの証人とそうでない人の両方で構成されているような家族である。多世代世帯で暮らす理由は、介護や親孝行、経済的、感情的、その他のニーズなどさまざまである。この数字の背景には、家族単位であらゆる年齢の個人を支える独特で複雑な人間関係がある。このデータは、エホバの証人の世代間のつながりの高さを示唆している。

¹¹ 2020年には、日本の個人世帯数の約38%を単身世帯が占め、半数以上を核家族世帯が占める。単身世帯数は過去20年間にわたって増加している。「日本における単身世帯の割合（2000-2020）」(Share of Single Households Japan 2000-2020), Statista, アクセス日: 2024年3月5日, <https://www.statista.com/statistics/606243/japan-one-person-households/#:~:text=In%20%2C%20one%2D%20person%households,over%20the%20past%20t%20decades>

先に述べたように、ほとんどの回答者は仲間の信者を頼れる社会的なネットワークと見なしている。このような会衆の親密さは、多くのエホバの証人が家族の中に同じ宗教を信仰する人がいないために生じるのだろうか。そうではない。回答者の大多数（82.6%）には少なくとも1人のJW親族がおり、最も多いのは母親、次いで父親、または1人以上の祖父母であった。4分の1には同じ宗教を信仰する兄、弟、姉、妹がいた。証人の親族はいないと回答したのは約5分の1だった。

家族に対する満足度と家族の機能 回答者の家族生活の質に対する見方は、「家族との生活に満足していますか」という質問によって測られた。図4に示すように、90%近くが「とても満足している」か「まあまあ満足している」のどちらかを選択し、逆に「あまり満足していない」か「全く満足していない」と答えた人は8%未満であった。

図4. 家庭生活への満足度
家族との生活に満足していますか。



聖書を学んでいなければ、自分優先で家族を後回しにしていたかもしれませんが、妻そして、子どもの身体的、精神的、感情的な必要を優先することが、家族のリーダーとして大切であることを訓練されてきました。

男性、40代、第2世代

家庭内のコミュニケーションの質、親密さや葛藤の程度は、家族を構成する一人一人や家族全体に影響を与える。JWJ-QSでは、家族の機能に関する3つの側面（結束、感情表現力、葛藤）について検証された尺度を用いて調査を行った。¹²

¹²シャーロット・チン・ティン・フォーク、ジェームズ・アレン、デービッド・ヘンリー、ピーポー・アウェイキング・チーム、「家族関係に関する簡易尺度：家族機能における人間関係に関する簡易尺度」("The Brief Family Relationship Scale: A brief measure of the Relationship Dimension in Family Functioning"), 『評価』(Assessment) 21, no.1 (2014) : 67-72, <https://doi.org/10.1177/107319111425856>

回答者の80%以上が、家族の感情表現力を肯定的に評価している。大多数が自分の家族は結束力があると感じており、90.8%が「家族同士、よく助け合い、支え合っている」という記述に「当てはまる」と回答した。また、「一緒に何かをして、たくさん時間を過ごす」や「一体感を感じる」という記述に「当てはまる」と回答した人は4分の3に上った。

家族機能測定のエホバの証人尺度では、家族の中でよく言い争いをするか、あるいはよくけなし合うかを尋ねている。回答者の3分の1弱が、自分の家族には怒りっぽく、言い争いが多い特徴があると答えた。少数の回答者（213人）は、「家族の中に時々暴力を振るう人がいる」という記述に「当てはまる」と回答した。ほとんどのエホバの証人は、自分の家族に感情表現力と結束力があると回答しているが、一部の回答者は、家庭内の問題と闘っていると答えている。

家族の機能については、性別、年齢、婚姻状況、夫婦で信仰する宗教が異なるか、またエホバの証人と

しての年数も調査された。その結果、高齢者では肯定的なスコアが低く、男性、既婚者、JW歴の長い人では肯定的なスコアが高かった。

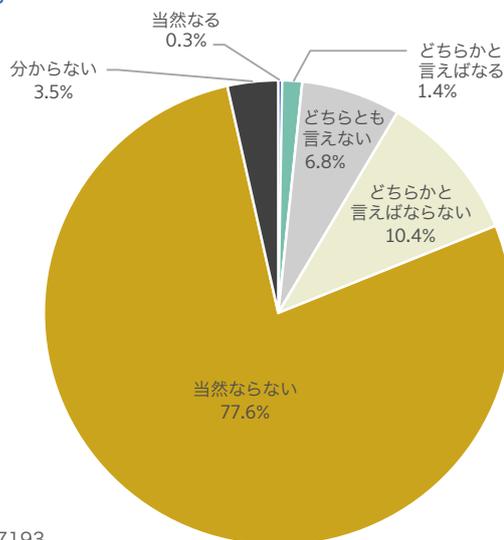
結婚と離婚

結婚の絆を大切にする決意は、夫婦関係の継続期間と満足度に関係している。配偶者が同じ宗教を信仰しているかどうかにかかわらず、回答者は結婚の絆を大切に強い決意を持っていることを示した。もちろん、配偶者もJWである回答者の方が、決意や満足度は高かった。

宗教の違いは離婚の理由にならない 宗教の違いは夫婦間の対立を引き起こし、離婚につながる可能性があるため、配偶者が同じ信念を持っていない場合、それは「離婚の妥当な理由になる」という質問をした。図5を見ると、77.6%の回答者が、宗教が違うことは離婚の理由に「当然ならない」と答えており、離婚する理由に当然なると答えたのはわずか0.3%であった。

図5. 宗教の違いは離婚の妥当な理由にならない

夫婦の片方がエホバの証人で、もう片方が同じ信念を持っていない場合、それは離婚の妥当な理由になりますか。



エホバの証人の4分の3は、宗教的信条の違いは離婚の理由にならないと考えている。

注：n = 7193

幸せな結婚生活の鍵 配偶者がJWである人、JWでない人を合わせて、99%以上の回答者が最も重要な要素として「相手を裏切らないこと」を挙げた。「宗教的信念が同じであること」、「問題についてすぐに話し合えること」、「理解力と寛容さ」が次に重要な項目として挙げられた。幸せな結婚のためにあまり重要でないと考えられている要素は、「良い生活環境」、「性関係に満足していること」、「社会的背景が同じであること」、「子どもがいること」などであった。

成人した子どもが思い返す子どもの頃の矯正

本調査では、エホバの証人が日本における子どもの矯正の方法についてどのように認識しているか、また、その矯正の方法が性別、世代、親がJWかどうかによってどのように異なるかを調査した。回答者は、両親や学校関係者が用いたさまざまな矯正の方法についての記憶を回答した。

矯正のアプローチの分析は、全サンプルについて計算され、性別、世代、親がJWかどうかごとに分けられた。矯正のタイプは以下のように分類された。

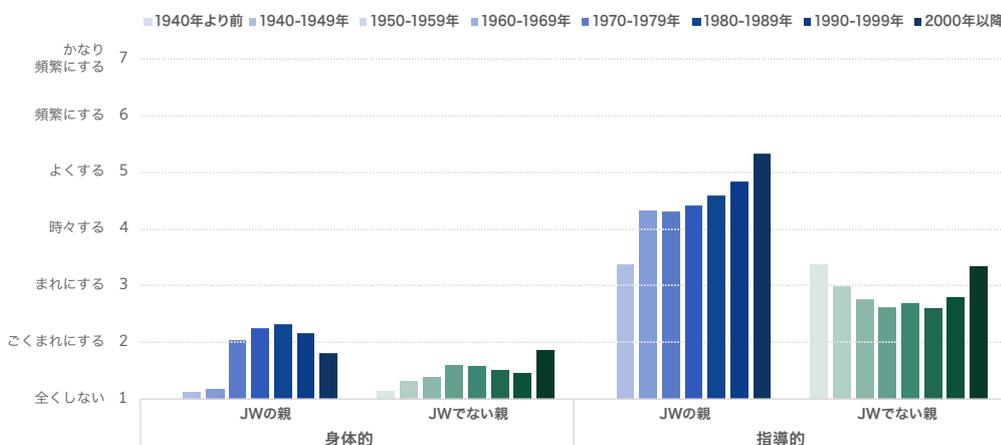
- 言葉（大声を出す、叫ぶ、しかる、何かすると脅す）
- 間接的（無視する、口をきかない、どこかの部屋に行かせる）
- 行動的（家事や雑用を増やす、何かを取り上げる、禁止する）
- 身体的（物でたたく、平手でたたく）
- 指導的（いいことをしたことを褒める／行動がどうして良かったか、または悪かったかを説明する）

回答者は、親が複数のタイプの矯正を行っていたことを思い起こした。しかし、ほとんどのタイプの矯正は、使われるのがまれだったか、ごくまれだったと報告されている。

性別と世代 全ての矯正の方法において、父親より母親の方が多く関与しており、全てのタイプの矯正をより頻繁に使用しているようである。世代間の違いを分析するため、調査回答者を生まれた年に基づいて年代別にグループ分けした。1940年代と1950年代生まれの回答者は、矯正の頻度が少なかったと記憶しているが、数十年前の記憶や認識は実際の状況とは異なる可能性が高い。2000年以降に生まれた回答者は、体罰がピークに達したとされる1970年代生まれの回答者に比べて、身体的矯正は少なく、指導的矯正が多かったと回答している。データは、親の矯正と学校での矯正について、時間の経過とともに同様のパターンを示しており、文化的な影響がより大きいことを示唆している。

親がJWかそうでないか 成人した子どもは、JWの親がJWでない親よりも矯正をよく行っていたと回想している。図6は、回答者がJWの親とJWでない親について、身体的矯正（手や物でたたく）と指導的矯正（褒める、説明する）を示したものである。JWの親はJWでない親に比べて指導的矯正をかなり多く行っており、JWでない親は指導的矯正をほとんど行っていない。JWの親もJWでない親も身体的矯正をすることはほとんどなかったが、最も若い年齢のグループに注目すると、JWの親の身体的矯正は減少傾向にあった。

図6. 成人した子どもが思い起こす、親が用いた矯正の方法（世代間比較）



注：サンプルサイズは各サブグループと各年代のグループで異なる。

親が用いる矯正の方法は時代とともに変化する。
身体的矯正を行うことはごくまれだった。
指導的矯正は1970年代以降、上昇傾向にある。

子育てにもっと愛情を注いであげたら良かったと反省してます。母子家庭で生活ばかりに目を向けていたからです。

女性、70代、第1世代

確かに子供の頃親が厳しかったことはあった。お尻を叩かれたこともあった。でもその時代は学校でも体罰は普通にされていた。それを思い出してトラウマになるなどということはない。

男性、50代、第2世代

現在受け入れられている矯正の方法 回答者に、現在受け入れられると思う矯正の方法を選んでもらった。最も多く選ばれたのは「指導的矯正」、次いで「行動的矯正」であった。エホバの証人にとって「矯正する」という言葉によく当てはまるとするのは、「教える」(91.7%)や「正す」(90.4%)だった。「矯正する」という言葉が「体罰を与える」ことによく当てはまると回答した人はわずか2.2%だった。5962人のエホバの証人が、親が子どもに体罰を加えることについて、どの程度行うのがふさわしいと思うかについて回答した。「全くしない」(83.1%)、「ごくまれにする」(12.0%)、「まれにする」(3.1%)と回答した人が98.2%を占めた。

エホバの証人の出版物や集まりの内容に関しては、子育てに対する態度や行動といった点が評価された。回答者の90%以上が、親に勧められている行動として、「許すこと」、「レクリエーションを子どもと一緒にすること」、「子どもが失敗した時にも、愛していることを子どもに伝えること」、「子どもに自分の意見を自由に話させること」を選んだ。回答者は、JWの出版物が体罰以外の矯正の方法を勧めており、子どもを身体的また性的な虐待から守るべきことについて広く知らせる面で貢献していると見なした。

全般的な見方

エホバの証人は、独特の宗教的信条を持つてはいるが、日本に住む他の人々と多くの共通点を持っている。エホバの証人が気に掛けている主な要素は、社会全体にとっても珍しいものではない。JWの回答者の90%以上が、自分と家族の安全、信仰の成長、家族との関係、自分と家族の健康、悪い習慣をやめることを気に掛けている。

宗教と性教育

JWの両親を持つ回答者は、JWでない両親を持つ回答者よりも、親が子どもに同じ宗教を信仰することを望んでいると答えた。子ども時代、回答者は両親とセックスや道徳について話すことができた。回答によると、JWの親にとってもそうでない親にとっても、宗教はセックスに比べて親子で話し合いやすい話題のようである。回答者は、JWの親が(JWでない親よりも)、自分の決断についてよく考え、大人になってから役立つ価値観を身に付けるよう教えてくれたことに同意している。

性教育に関する情報源はさまざま、明確な情報源はなかった。調査では、性教育の有用性について尋ねた。回答者のほぼ全員(98.9%)が、性について子どもに教えることは子どもを守ることになり、この点で親に重要な役割があることに同意した。

性的虐待から子どもを守るための情報について、エホバの証人はJWの出版物を含むさまざまな情報源から学んでいる。回答者は、親が自分の宗教的信条について子どもに教えるべきであることに同意したが、「成長した子どもには、自分の宗教を決める権利がある」ことにも同意した。

JWの回答者の89.6%にとって、信教の自由を気に掛ける程度は適度から極度であった。約3分の1が日本の政治状況に適度から極度の懸念を表明した。この懸念が、信教の自由に対する国家の干渉という現在の脅威に関するものなのか、それとも他の政治的問題に関するものなのかは不明である。

この調査では、JWの回答者に人生における優先事項について質問し、8項目が自己志向、8項目が他者志向に分類された。回答者は自分の利益よりも他人の利益を優先した。信仰に関する項目（神に仕えること、安らかな良心を持つこと、道徳基準に従って生活すること）が特に優先された。家族に関する項目も優先度が高く、特に家族円満や家族の幸せ、子どもや高齢の親族の必要を優先していた。人に敬意を払うことや、困っている人を助けることは優先事項であるが、信仰や家族に関する項目よりは優先度が低かった。出世、物質的なもの、個人の成功、面白い趣味といった自己志向的な項目の優先度は低かった。

市民としての責任 エホバの証人の市民としての責任感を理解するために、調査では回答者に特定の違法行為や非倫理的行為を正当化できるかどうかを尋ねた。「決して正当化できない」という回答が最も多かったのは、他の人をJWにするために、「力にものをいわせたり、強制したり、お金や物で釣ったりする」こと（99.1%）だった。次いで、「アルコールや薬物の影響を受けた状態で車を運転すること」（98.5%）、「自分に権利のない公的給付金を請求すること」（97.5%）が挙げられた。比較的軽微な犯罪である公共の場所にごみを捨てることでさえ、89.9%が正当化できないと見なしている。

非暴力と政治的中立に関する社会的・政治的立場
政治的中立、非暴力、政府の法律に関する記述で

は、「他の人に対して武器を使いたくない」（97.2%）、「人の命を大切にする」（97.0%）、「政治についてどちらの側にも付かない」（96.3%）、「政府が定めた法律を尊重している」（94.5%）、「平和な行動と納税によって国の役に立っている」（92.0%）という記述への同意が特に高かった。

助ける意欲 この調査では、エホバの証人が自分のグループにはいない人たちをどの程度喜んで助けるかを調査した。回答者は、9つのカテゴリーの人々に関して、その人が緊急に助けを必要としている場合に助けるかどうかを答えた。多くの社会集団でも同じ結果が予想されるが、エホバの証人も仲間の信者を助ける可能性が高いと回答した。（98.7%）子どもの多い家族など、より多くの助けを必要としそうな人を助ける意欲も高かった。（92.8%）同様に、89.8%の人が、政府関係者や警察など、他からも助けを得られると思われる人を助けたいと回答した。裕福な人と貧しい人を区別する人はほとんどいなかった。（それぞれ85.1%と94.5%）他の宗教の人を助ける意欲は高く、（95.1%）エホバの証人の組織を離れた人を助ける意欲も高かった。（81.9%）「答えにくい」の割合が最も高かったのは、エホバの証人の組織を離れた人（1.2%）、アルコール依存症の人（1.0%）、薬物依存症の人（1.4%）であり、援助するかどうかを決める前にさらなる情報が必要であることを示唆している。

生活における判断 この研究では、エホバの証人がどのように正邪の判断を下しているかを調査した。その結果、エホバの証人の間では、97.6%が生活における判断をする際に道徳的基準が重要であると回答し、均質性が確認された。

健康と幸福

この最後のセクションでは、エホバの証人の健康と幸福に関するさまざまな尺度、医療に対する態度、個人の健康習慣について取り上げる。

ほとんどの回答者 (78.2%) は、自分の健康状態を「普通」、「良い」、「とても良い」と認識している。最も多かったのは「普通」で41.6%、健康状態が「良くない」と回答したのは少数で2.8%だった。

食事と運動 本調査では、参加者に食生活に関する評価を尋ねた。ほとんどの人 (62.1%) は、自分の食習慣を「たいてい健康的」(47.2%) または「いつも健康的」(14.9%) と認識していた。少数 (3.2%) の回答者は、自分の食習慣を「たいてい健康的でない」(2.8%) または「全く健康的でない」(0.3%) と回答した。

回答者のかなりの割合が運動をしており、20.2%が「定期的に」、37.4%が「時々」運動をしていると答えた。逆に、30.6%は「まれに」しか運動せず、11.3%は「全くしない」と答えた。

たばこ、薬物、アルコールの使用と乱用 データから、参加者の喫煙習慣の分布が明らかになった。回答者の大多数 (79.1%) は一度も吸ったことがないと答え、19.8%は以前は吸っていたが今は吸っていないと答えた。時々、あるいは頻繁に喫煙習慣があると答えた回答者はごくわずか (0.1%) であった。これらの調査結果は、調査対象者が禁煙行動を非常によく守っていることを裏付けている。

圧倒的の大多数が、ソフトドラッグ (99.1%) や、ハードドラッグ (99.5%) を使用したことは一度もないと答えた。アルコールを乱用したことが一度もないと回答したのは80.8%で、9.7%は、以前はアルコールを乱用していたが、今はしていないと回答した。頻繁にアルコールを乱用していると回答した人はさらに少なく、0.7%だった。

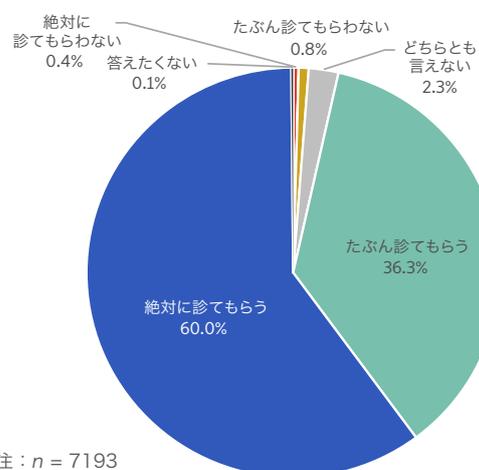
健康に関する態度と習慣 本調査では、医療を受ける決断に影響を与える要因、既存の医療に対する満足度、医療へのアクセスや質に関する意見など、回答者の医療に関する見解や好みについて尋ねた。

回答者の大多数 (66.6%) は定期健診を定期的に受けていると答え、14.8%は時々受けていると答えた。まれにしか受けない (11.7%)、または一度も

受けていない (6.4%) と回答した人の割合は18.1%と少なかった。

健康上の問題で医師の治療を受けること 図7に示すように、回答者の大多数は、健康問題を抱えたら「絶対に」(60.0%)、または「たぶん」(36.3%) 医師に診てもらおうと答えた。「どちらとも言えない」(2.3%)、「たぶん診てもらわない」(0.8%)、「絶対に診てもらわない」(0.4%) と答えた人は少数だった。

図7. 医療を受ける
健康問題を抱えたら、医師に診てもらいますか。



医療に関する態度 回答者の大多数 (84.4%) は、医師が患者のことを気に掛けていることに同意した。大半 (60.4%) は、医師からの指示には無条件で従わなければいけないという意見に同意せず、4分の3 (75.2%) は、治療についての重要な決定をする前に複数の専門家に相談する必要があるという意見に同意した。子どもの健康に対する親の責任 (99.0%)、子どものために最善の治療を求めることの重要性 (98.0%) については、強い同意が得られている。治療法を慎重に選択する必要性については、ほぼ全ての回答者が同意している。(99.4%) 病気になったら治療を受けることの重要性については、大多数 (97.1%) が「同意」または「強く同意」した。逆に、治癒に関して祈りのみに頼るという考え方には、大多数 (98.3%) が否定的だった。これらの調査結果は、回答者の間に微妙な理解の差異があることを示唆しており、医療の専門家に対する信頼と、医療に関する意思決定における個人の自主性の重要性のバランスを反映している。

回答者の大多数は、ビタミン剤 (87.8%)、外科的処置 (91.5%)、化学療法 (79.5%)、放射線治療 (79.9%)、薬物治療 (75.8%)、抗うつ剤 (66.9%)、理学療法 (81.8%)、人口透析 (68.0%) などの治療を受け入れることに前向きであることを表明した。しかし、臓器移植 (73.1%) や輸血 (99.3%) については、ほとんどの回答者が「おそらく受け入れない」または「絶対に受け入れない」と回答しており、後者はエホバの証人の宗教観と関連している。

輸血拒否の理由 エホバの証人は、聖書が食べ物としてであれ輸血の形であれ、血液を摂取することを禁じていると信じている。回答者の95.5%が、医師から輸血を勧められても受け入れないと答えている。

この調査では、輸血を拒否するさまざまな理由の重要性を回答者に尋ねた。99.5%の回答者が、血液は神聖なものであり、血を避けることは聖書の命令であるという記述に対して「重要」または「とても重要」と考えた。半数以上 (62.9%) は、汚染された血液への恐怖も輸血を拒否する「重要」または「とても重要」な理由であると回答した。血液を用いた医療を拒否する重要な理由として、JWコミュニティー内での良くない反応に対する懸念を示したのは3分の1以下 (30.9%) だった。

子どもの医療に対する親の態度

未成年の子どもがいる533人の回答者は、自分自身の治療に対する希望を述べた後、子どもの治療に関する医師からの勧めに対する見解を尋ねられた。

ビタミン剤 (88.2%)、外科的処置 (94.0%) については、医師からの勧めを受け入れる割合が比較的高い。しかし、未成年の子どもを持つ親の89.1%が輸血は受け入れないと回答している。臓器移植に関しては、51.4%が自分の子どもについて勧められても受け入れないと答えている。化学療法と放射線治療については、それぞれ69.6%と67.2%の回答者がこれらの医療を受け入れる可能性があるとは回答した。

本調査では、次の2つの仮想的な状況について質問した。(1) 以下の文にどの程度同意するか。「子どもが私の願いに反して輸血を受け入れたなら、私はその子を自分の子どもとは認めない」。90.8%の親が「同意しない」または「全く同意しない」、5.8%が「どちらでもない」、0.6%が「同意する」、2.8%が「答えたくない」と回答した。(2) 以下の文にどの程度同意するか。「私の願いに反して子どもが輸血をされかねないと分かったなら、私はその子に必要な治療のために医師に診てもらおうとはしない」。大多数 (60.4%) が「同意しない」または「全く同意しない」と答え、21.4%が「どちらでもない」、13.3%が「同意する」または「強く同意する」、4.9%が「答えたくない」と回答した。

命は神からのものなので、医療も神の命令に反しないものであるべきだと考えます。そのために特別な配慮をして下さる医師に感謝しています。

女性、40代、第2世代

幸福感の社会心理尺度

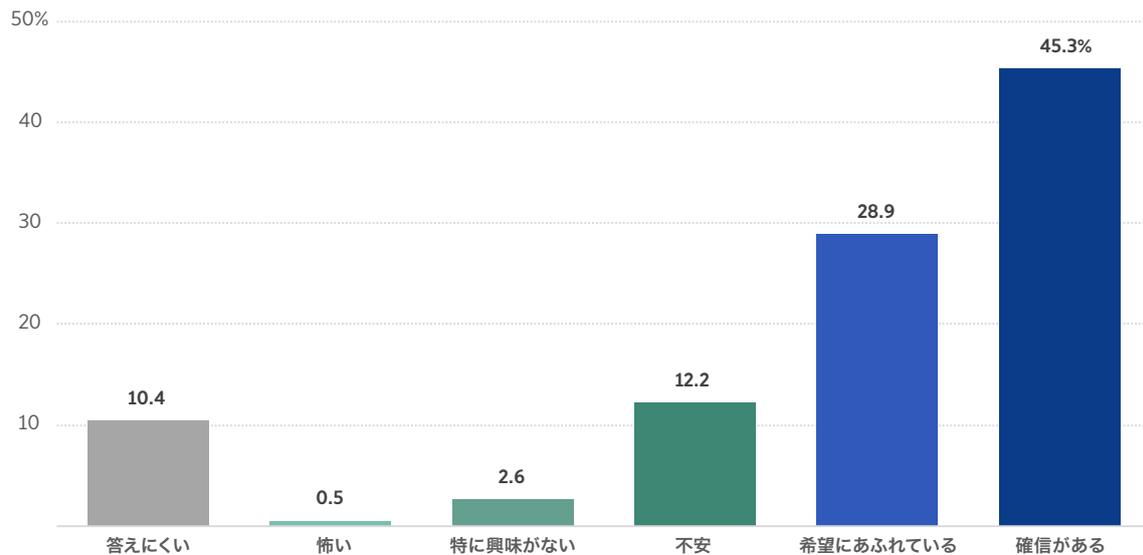
この速報の最後のセクションでは、回答者の幸福感や将来の見通しに関する主観的な感情を測定する質問セットを取り上げる。

生活満足度 回答者は生活満足度を1 (満足していない) から10 (満足している) の10段階で評価した。10分の1 (10.8%) が5点以下、89.2%が6点以上の評価を付けた。8点という高得点が最も多く選ばれた (33.9%)。年齢層別の回答を比較すると、特に78歳以上では、年齢とともに生活満足度が徐々に上昇していることが分かった。

将来の見通し 本調査には、「あしたや将来のことを考えると、どんな気持ちになりますか」という質問があった。図8に示すように、多くの回答者が、「確信がある」(45.3%)、「希望にあふれている」(28.9%)を選択した。「不安」は10分の1(12.2%)、「怖い」はわずか0.5%であった。「答えにくい」を選んだのは10分の1(10.4%)だった。

図8. 将来の見通し

あしたや将来のことを考えると、どんな気持ちになりますか。



注：n = 7193

希望 さらに、将来の見通しに関する具体的な記述を選んでもらった。その結果、「孤独を感じない」人が79.0%、「将来に恐れを感じない」人が84.3%、「信仰があるので、慰めを得られている」人が97.5%、「愛や世話を差し伸べたり受けたりできる」人が95.7%という結果が出た。

過去、現在、未来のそれぞれに対する感情 アンケート回答者には、人生のさまざまな時期に対する感情を、「とてもネガティブな感情」から「とてもポジティブな感情」までの選択肢で分類してもらった。ポジティブ、またはとてもポジティブという回答の割合は、子ども時代(38.0%)、現在(76.5%)、近い将来(83.0%)、もっと先の将来(90.9%)と、時期によって異なっている。

結論

JWJ-QSプロジェクトが始まったきっかけは、少数派宗教の2世問題によって信教の自由に関する論争が起こったことだった。この論争は過去2年間、日本で多くのメディアを賑わせてきた。JWJ-QSはエホバの証人を対象にし、特に子育て、親の権利、医療の選択に関する彼らの見解を調査している。日本のエホバの証人コミュニティから7000人以上のサンプルを抽出したこの定量調査は、さまざまな形で宗教の科学研究に貢献するものである。本結論では、主な研究テーマ（宗教、家族、見方、幸福）に関連する主要な調査結果を改めて取り上げ、次に調査結果から浮かび上がった3つのテーマについて論じる。日本のエホバの証人は、老若男女、教育レベル、経済的特徴、地域的背景の異なる多様な人々で構成されている。彼らの教育レベル、職歴、経済的特徴は、日本の一般人口と同程度である。人口統計学的に多様なグループであるにもかかわらず、彼らの意見や行動の多くには一貫性が見られる。

宗教 エホバの証人は、この宗教を信仰して生きていくという決断が、その信条と実践についてかなりの期間に及ぶ学びの後に初めて下される個人的な選択であると考えている。3分の1は成長する過程でJWの親から宗教的価値観や信念を学び、他の人々はバプテスマを決意する前に、通常2年以上の学習プログラムに参加した。バプテスマを受けた年齢はさまざまで、若い頃に受けた人もいれば、人生の後半になってから受けた人もおり、平均年齢は28歳だった。宗教的決断における家族の影響に関するデータから、JWの親族がいたことがきっかけで入信した人もいるが、JWの家族がいるからという理由で続けているわけではないことが明らかになった。入信しなければJWの家族や友人から拒絶されるのではないかと懸念を示した人は1%未満であった。

エホバの証人がこの宗教を続ける一番の理由は、「神ともっと親しくなりたい」からである。「教えが論理的であること」にひかれて入信した人が多く、この宗教を続ける主な動機となっている。その他の主な魅力は、「道徳的な指針」、「より良い人生の選択」、「将来への希望」である。

大多数はエホバの証人になったことをほとんど、あるいは全く後悔していなかった。比較的少数の人たちがさまざまな年齢（大抵は20代）でエホバの証人との交友をやめたが、その半数は4年以内に交友を再開し、4分の1は10年以上たってから戻ってきた。復帰の主な理由は「神ともっと親しくなりたい」という願いだった。（当初の改宗理由と同じ）その他の復帰の動機は、「より良い人生の決断をするため」と、「エホバの証人の生きの方が良いと思った」ことであった。

日本のエホバの証人は、自分たちの会衆を、特に困っているときに社会的・实际的に支えてくれる頼れる存在と考えている。ほとんどの人は、自分たちの宗教が家族関係やより広い地域社会との関係に有害な影響ではなく、良い影響を与えていると考えている。しかし、エホバの証人になったことで、良い交流が生まれる一方で、差別も経験している。ほとんどの人は、自分たちの宗教を誤り伝えていると感じる報道を目にしたことがある。宗教を理由に雇ってもらえなかったり、脅しや攻撃を受けたりした人もいる。

家族 回答者の大多数（62.7%）は結婚しており、別居または離婚しているのはわずか5.1%である。成人した子どもに対する両親の影響力は、少なくともどちらかの親がJWである人の離婚率が、親がJWではない人に比べて有意に低いことに反映されている。

る。ごく一部 (7.4%) に未成年の子どもがいる。未成年の子どもがいる親のうち約90%が結婚しており、未成年の子どもたちは家庭で2人の親から世話を受けている。JW サンプルのうち単身者は16.3% だけだった。(日本の一般人口における割合の約半分) 高齢者と同居している人は世代間のつながりが強く、若年成人の半数、中年成人の3分の1が高齢者と同居している。高齢者のかなりの割合 (15.7%) が未成年の子どもと同居している。

4分の3以上にJWの親族がいたが、5分の1にはJWの親族がいなかった。家族関係における個々の事情は、横断的な調査研究では調べることができなかったが、調査結果はJWの家族の全体像を示している。回答者は、家族生活に満足しており、家族が十分に機能していると感じている。大多数が家族生活に満足しており、家族は結束していると考えている。一部のJWは緊張した、あるいは問題を抱えた家庭状況にあり、3% (n = 213) は家族の中に時々暴力を振るう人がいると報告している。

結婚を大切に考える考え方は、結婚生活の満足度と今後の継続度を予測する最も有力な要因の一つである。既婚のエホバの証人は配偶者との結婚関係を続けていく強い決意を示している。全サンプルのほぼ4分の3は、同じ宗教的信条を持つことが幸せな結婚にとって重要であると答えたが、4分の3は、異なる宗教的信条を持つことは離婚の理由にはならないと考えている。JWの配偶者とJWでない配偶者の両方を含め、回答者のほとんど (99%以上) が結婚関係において相手を裏切らないことが非常に重要であると認識している。

研究結果から、日本で使われている矯正の方法を理解するためのより広い背景情報を知ることができる。JWのサンプルを構成する成人した子どもは、親や学校関係者が複数の矯正の方法 (言葉 [大声を出す、脅す]、間接的 [無視する、部屋に行かせる]、行動的 [家事を増やす、何かを禁止する]、身体的 [物や手でたたく]) を用いたと回想している。

しかし、親の性別、世代、宗教をグループ別に比較すると、言葉による矯正、間接的矯正、行動的矯正、身体的矯正はほとんど使われていなかった。JWの親もJWでない親も、身体的矯正はほとんどしていない。母親は父親よりも矯正に多く関与しており、全ての矯正の方法をより頻繁に用いていた。身体的矯正は、家庭と学校の両方の場面で、特に1990年代以降、時とともに変化してきた。指導的矯正 (褒める、説明する) の使用は1970年代から増加傾向にある。2000年以前は、JWの保護者はJWでない保護者よりも身体的矯正を頻繁に用いていた。JWの親はJWでない親に比べて、1940年代から指導的矯正をはるかに頻繁に使用し、その後10年ごとに着実に増加している。回答者によると、JWの出版物や集会の内容は褒めることを強調し、身体的矯正を推奨してはいない。これは、回答者が「矯正」の意味をどのように理解しているか (体罰ではなく、教えて褒めること) という点と一致している。

JWの両親を持つ人々は、JWでない両親を持つ人々よりも、両親が性や宗教についての話し合いにオープンであったと回想している。エホバの証人は、児童保護に関するサービスや子どもを性的虐待から守ることの重要性についてよく知っている。回答者はメディアなどの情報源に加えて、JWの出版物や集まりでこれらの重要な話題について学んでいる。調査の回答によると、エホバの証人は、子どもたちが自分の決断についてよく考え、責任ある大人になるよう助けるという自分たちの役割を真剣に受け止めている。子どもたちの学びは成長に合わせた段階的なものであるべきで、成長した子どもたちは自分の宗教を自分で選ぶべきだと考えている。成人した子どもたちは、両親から学んだ価値観が大人になってからも役立っていると感じている。

日本のエホバの証人は、自分よりも他の人のことを優先して考える傾向があり、この宗教コミュニティでは個人志向よりも集団志向的な文化があることが分かる。神との絆や安らかな良心を持つこと

が最優先事項であると評価された。家族の円満や幸せは、個人的なニーズ、成功、出世、独立よりも優先度が高かった。JWの主な関心事は、信仰に関することと個人的な習慣の改善であり、安全、家族、信教の自由に関することがそれに続く。経済的なことや政治的なことはそれほど重要視されていない。

エホバの証人の大多数は社会的責任感を持っており、違法行為や非倫理的行為は「決して正当化できない」と考えている。「他の人をエホバの証人にするために、力にものをいわせたり、強制したり、お金や物で釣ったりすること」、「アルコールや薬物の影響を受けた状態で車を運転すること」、「自分に権利のない公的給付金を請求すること」は、JWが好ましくないと考える行為のトップ3であった。社会的責任についての考え方は、エホバの証人をやめた人を含むさまざまな経済的、社会的、宗教的背景を持つ人々を助ける意欲を示していることから読み取ることができる。彼らは、自分たちの決断は道徳的基準によって導かれるものであり、たとえ自分たちの行動が人に見られていないような状況であっても妥協すべきものではないと考えている。

健康と幸福 ほとんどのエホバの証人は、自分の身体的な健康状態が少なくとも満足いくものであると評価し、食事、運動、定期健診の面でより健康的な生活習慣を目指しており、自分自身や自分の子どものためにどんな治療法を受け入れるかも回答している。アルコールと薬物の乱用、タバコの使用は、この調査対象者に当てはまらない。全体的に、人生に対する肯定的な評価、希望、現在と将来に対するポジティブな感情を持っており、前向きな見方をしている。

付加的な観察 調査結果には幾つかのテーマが見られた。第一に、回答者は、神との絆が自分たちの決断の中心であり、神と親しくなりたいと思うことがエホバの証人になり、エホバの証人であり続ける動機であると述べている。道徳的に良い決断をすること、安らかな良心を持つこと、命を大切にすること、自分の信念を他の人々に伝えること、子どもたちを教えることは、この中心的な信念の延長線上にある。一定期間JWコミュニティとの交友を中断

した人々は、神との絆が交友を再開する主な動機であったと報告している。

第二に、エホバの証人は決定を下す前に情報を求める傾向がある。例えば、エホバの証人はバプテスマを受ける前に一定期間聖書を学ぶ。彼らは「教えが論理的であること」にひかれるのである。バプテスマを受ける前も受けた後も、おそらく何年も勉強しているにもかかわらず、「聖書についてもっと学びたい」というのが、多くの人がこの宗教を続ける主な理由である。同様にほとんどの回答者は、両親から「自分の人生の決定についてよく考えるよう」教えられたと答えている。医療に関する決定をする際に輸血を受け入れない理由は、主に宗教的な信条によるものであるが、血液を使った治療に関連する医学的リスクについて十分な知識を得ていることも理由として挙げられる。

第三に、エホバの証人は他の人の必要を思いやり、個人の権利と責任を尊重するような方法で、人間関係を構築しようとしている。社会的なつながりが強く、他の人の幸福に関心があることは、世代を超えた世帯の割合、結婚の絆を大切にしている考え方、会衆を支えになる頼れる存在と見ていることから明らかである。しかし、個人の決定は尊重され、そこに干渉することはない。その中には成熟していく子どもたちの決定も含まれる。

限界と今後の方向性

本研究には、オンライン調査や宗教研究に共通する幾つかの限界がある。例えば、オンライン調査特有の問題として、回答者のサンプルを一定の状況下で可能な限り代表的なものにするよう注意を払ったとしても、研究者は全ての回答者が調査母集団を代表しているとは確信できないという点がある。参加資格を満たしている人だけが回答できるようにするため、アンケート調査への参加案内とリンクは、無作為に選ばれた会衆の基準を満たした人にもみ送られた。基準を満たさないことを示した個人はアクセスを拒否された。

JWJ-QSのアンケートは、一般に推奨されているオンライン調査よりも長いものだった。高い回答率と

提出数から、JWという集団は長いアンケート、特に自分たちの宗教共同体のために作られたアンケートに寛容であることが読み取れる。しかし、回答者の疲労は無視できない要素の一つであり、回答者が質問について考え、答える時間に影響を与えた可能性がある。

アンケートを英語から日本語に翻訳するに当たっては、質の高い翻訳をするために、バックトランスレーション（逆翻訳）を繰り返し実施した。しかし、表現によってはニュアンスが異なり、設問の回答に影響を与えることもあった。

横断的研究では、因果関係を証明することはできない。JWJ-QSでは、回答者は改宗してからの人間関係や健康習慣の変化を報告しているが、これらの結果は本人が感じた影響を示しているのであって、観察可能な、一定期間にわたる行動の変化を検証したものではない。同様に、子育てに関する報告は、成人した子どもの過去の経験に関する回想に基づいている。

この調査には、本報告書の「方法」のセクションにあるように、社会的に望ましい回答（SDR: Socially Desirable Responses）の影響を制限するための手順が組み込まれている。対象者の募集時にも調査自体でも、匿名性が保たれ、自由に回答してほしいということが強調された。自分自身や自分が選んだ宗教に好意的な回答をする可能性の高い人を特定し、データセットから除外するために、SDR尺度が用いられた。それでもなお、デリケートで個人的な話題に関する研究において、社会的望ましきバイアスの影響を避けることはできない。研究結果によると、信念に関する質問に対してはほとんどの回答が同質的だったが、人間関係や個人的な習慣に関する回答は多様であり、回答者が飾らずに回答したことが読み取れる。

研究者の個人的な信条や期待によって科学的公正さが損なわれるとバイアスが生じ、研究の客観性に影響を与える可能性がある。本研究の研究者は2人ともJWであり、研究対象者についての個人的な知

識、および情報科学と統計分析における専門的な資格の両方によってこのプロジェクトに貢献した。調査デザイン、データ分析、報告には、偏りを緩和する手段が組み込まれた。（例：匿名のオンライン調査、第三者によるデータ収集、厳密なデータ分析、望ましい知見と望ましくない知見の報告）研究経験が豊富な学術諮問委員会（JWではない）が、調査デザインと手順を検討した。彼らは学術的研究を通してその団体について情報を得た。諮問委員会の学者の1人が、どの会衆を含めるかを独自に無作為に選択した。JWの文化に精通していることは、研究者が調査集団に適した質問をデザインするのに役立つ。このようにして、個人的なバイアスを排除し、データ結果を結論に正確に反映することができる。

結論として、本研究は、日本のエホバの証人が自分自身と自分たちの宗教をどのように見ているかを、調査に基づいて明らかにするものである。この研究が行われたのは、日本のエホバの証人に関する科学的研究が不足していたからである。知識の欠如は、固定観念や誤解につながるものが少なくない。現在、一部の元信者による厳しい批判やセンセーショナルな主張が広く見られている。JWJ-QSが目指したのは、科学的アプローチを使って、日本の一般のエホバの証人が自分たちの立場を説明するための情報を提供することである。エホバの証人の見解や行動は他とは異なる特徴的なものであり、さらなる研究の可能性を秘めている。われわれ研究者は、多くの学者がこのグループに対する理解を深める上で本研究が役立つことを期待している。

本調査は、2023年12月27日、独立機関審査委員会であるパール治験審査委員会（Pearl IRB）により承認された。全てのデータ収集・管理手順は、倫理基準および1964年のヘルシンキ宣言とその改訂事項を順守している。資金提供はアーノルド・リーブスター財団。（平和、寛容、人権を促進する目的で設立された。）